コンラート・ゲスナー『総覧』および『神学の分類』の分類体系に関する研究

雪嶋　宏一

Summary

This paper has a purpose of studying on the classification system and features of the way of recording literatures in the *Pandectarum* (Zürich: Christoph Froschauer, 1548) and the *Partitiones Theologiae* (Zürich: Christoph Froschauer, 1549) of Conrad Gessner. As a result of comparing the classification system of Gessner with the system made by Conrad Pellikan for the catalogue of the Großmünster Library, Zürich, it is clear that Gessner did not follow simply Pellikan's system but he stuck to the traditional medieval scholarly system. However, it is an important feature that Gessner made a subdivision system into six such as Liber, Titulus, Pars, Segmentum, Paragraphus and Locus. He divided the classification into 21 libri, 249 tituli, 712 Segmenta, 1,508 Paragraphi and 40,130 Loci supplied with 11 Appendices, although he made some irregularities such as irregular three Indexes in the Liber XIX and confused four Sengmenta and irregular eight Ordines in the Liber XXI. It is another important feature that the catalogues contain various subject indexes, for example, bibliography of bibliographies, bio-bibliographical indexes, bibliographical indexes for vocabulary and nomenclatures of plants and animals, etc. Gessner used several specific literatures over and over in many classes. One of these literatures is Lodovico Ricchieri's *Lectionum antiquarum libri XXX* (Basel: Froben, 1542). Gessner might cut the table of contents of the book to each chapter in order to use in the various Libri.

1．本研究の目的

スイスの博物学者コンラート・ゲスナー（Gessner, Konrad, 1516–1565）は初期の大作『万有書誌 *Bibliotheca Vniuersalis*』第 1 巻（Zürich: Christoph Froschauer, 1545）（以下引用箇所では BV1 と略）を執筆した後に，そこに収録した文献情報とその後知り得た文献情報の補遺によって第 2 巻の第 1 分冊となる『総覧 *Pandectarum, siue Partitionum uniuersalium*』（Zürich: Christoph Froschauer, 1548）（以下引用箇所では BV2-1 と略）および第 2 分冊となる『神学の分類 *Partitiones*

Theologicae,』（Zürich: Christoph Froschauer, 1549）（以下引用箇所では BV2-2 と略）を編纂した。この第 2 巻は西洋初期のシステマティックな分類目録としてつとに知られ，図書館情報学の古典となっている。しかし，わが国ではその内容に踏み込んだ詳しい研究はこれまでほとんど行われていない。したがって，『総覧』と『神学の分類』における分類の体系の系譜と下位区分のシステムの特徴について詳細に調査して，そこにどのような文献がどのような方法で採録されているのか，そこには分類目録としてどのような特徴があるのか考察することを本稿の目的とする。

2．研究史

これまで，『万有書誌』第 1 巻よりもその第 2 巻である『総覧』および『神学の分類』に関する研究のほうが多数発表されてきた。20 世紀最初の『万有書誌』の研究者であるエッシャー（Escher, Hermann）は，ゲスナー『万有書誌』の概括的な研究を行い，『総覧』は Loci communes という一般概念あるいは主題概念の体系によって配列されたもので，約 250 Tituli，3 万改行（主題）以上が含まれ，Klassen，Titeln，Partes，Segmenten に細分されるとみなした。しかし，それぞれの分類の詳細には踏み込まなかった[1]。エッシャーは続いてゲスナーの『総覧』の Liber 1: De Grammatica（文法），Titulus 13: De variis（諸事），Pars 2: De indicibus librorum（書物の索引）でゲスナーが説明しているペリカン（Pellikan, Konrad, 1478–1556）による著者名目録の作成方法に注目して，ペリカンが編纂したチューリヒ大聖堂グロスミュンスター（Großmünster）図書館蔵書目録からゲスナーへの影響について言及した[2]。一方，ルッツ（Lutz, Hans）は『総覧』，『神学の分類』各分類冒頭の印刷出版者への賛辞と彼らの印刷販売書目録を検討して，現存する目録と比較したが，分類システムには言及しなかった[3]。戦後，ソ連のシャムーリン（Шамурин Е. И.）は分類の歴史概説の中でゲスナーを取り上げて各分類の概念について解説したが，ペリカンの目録の影響や分類システム，文献採録方法などについては詳しくは言及しなかった[4]。その後，アーチャー（Archer, Taylor）がゲスナーの分類の中で詩学，歴史，自然哲学，神学の分類の一部を例にして Titulus レベルまで言及して，分類の構成とそこで参照された文献の特徴をとらえて主題索引とみなしながらも，利用しづらさも指摘した[5]。どのような文献が収録されているのか詳細に調査したのはバーンスタイン（Bernstein, Lawrence F.）である。彼は音楽の分類に収録された文献の同定と同時代の目録との詳細な比較を行い，ゲスナーの目録の収録文献が最も豊富で，今日には伝わっていない文献が含まれていることを明らかにした[6]。続いて索引研究家のウェリシュ（Wellisch, Hans H.）はエッシャーとは別に，『総覧』の Liber 1，Titulus 13，Pars 2 の序文とも言うべきゲスナーの索引作成方法の説明文のほぼ全文を英訳した。そして，『神学の分類』巻末に置かれた索引の項目数を約 4,000 件と算定して，この索引について説明を加えたが，ゲスナーの分類体系と分類の細部については一切触れなかった[7]。その後，セッライ（Serrai, Alfredo）は『総覧』および『神学の分類』の各分類を詳細に検討して，Liber，Titulus，Pars，Segmentum の細分化の詳細を記述し，さらに最小区分の Locus の数を 40,119 件と算定した。しかし，その上位区分の項目数については明示しなかった。

彼はそれまでの研究では言及されていなかった分類の細部に至るまで観察したが，Locus にはどのような主題のもとにどのような文献が参照されているのかというという点については明らかにしなかった。なお，セッライの研究では下位区分の識別に曖昧な点がありやや問題がある[8]。また，ロイ（Leu, Urs B.）は『総覧』と『神学の分類』の分類の構造を詳述して百科事典とみなした。とりわけ神学の分類についてはゲスナーが『神学の分類』の序文で提示した分類体系に沿って神学分類を詳述したが[9]，文献の採録方法については言及せず，また分類項目数についても算定しなかった。

このような研究史から明らかなように『総覧』と『神学の分類』は比較的詳しく研究されてきたにもかかわらず，分類の下位区分システムと各分類での文献採録方法とその特徴などについてはこれまでに十分に解明されたとは言えないのである。

3．『総覧』および『神学の分類』の分類体系の系譜

ゲスナーが生きた 16 世紀のスイスは宗教改革によって社会が大きく変動した時代であった。ゲスナーは少年期よりツヴィングリ（Zwingli, Huldreich, 1484–1531）がチューリヒで進めたプロテスタントの教育改革の中で勉学に励み，この時代の思潮に大きく影響された一人であった。

しかし，当時の学問体系は未だ中世の伝統の延長線上にあり，初等教育の必修科目として文法，論理学，修辞学の三科（trivium），中等教育の必修科目である幾何学，算術，音楽，天文学の四科（quadrivium）からなる自由七科と，大学で学ぶ教養科目である哲学，倫理学，歴史学，地理学，詩学等からなる学芸，その上級科目である法学，医学，神学からなっていた[10]。

ゲスナーが『総覧』で提示した分類体系は，ツヴィングリの蔵書を基にしてチューリヒ大聖堂に開設された図書館の蔵書目録を参考にしたものであると言われる[11]。この蔵書目録を編纂したのが聖書学者・ヘブライ学者であるペリカンである。彼は図書館開設直後の 1532 年から目録編纂を始めた。この蔵書目録は，第 1 部が著者名目録，第 2 部がシェルフ・リスト，第 3 部が分類目録，第 4 部が Loci communes（主題索引）からなる。139 ページから 372 ページまでが第 3 部分類目録であり，分類目録の冒頭（p.139）にペリカンによる 21 分類の体系が示されている[12]。分類体系は 2 欄にわたって表 1 のように示されている。分類に番号が付与されていないため，第 1 欄を上から下へ，そして第 2 欄を上から下へ進み，そして中央に置かれた Superstitio を最後にして表 3 に示した[13]。

ペリカンの分類の特徴は文法から天文学までの自由七科の次に神学を置き，その後に哲学，法学，学芸を置いていることである。これは中世以来の伝統的な学問体系の秩序を逸脱している。また，医学を‘Philosophia Medica’として哲学の中に入れていることも大変特異である。しかし，実際の目録の記述では必ずしもこの分類の順番通りではなく，地理学が幾何学の次に記述されている。なお，「道徳哲学」のように分類は示されているが，実際にはそこに 1 冊も書物が記録されていないものもある。分類目録では 161 ページから 272 ページまでを「聖書神学」から「異教の神学」までの神学の分類が占めており（途中白紙ページも含む），分類目録の約半分が神学に当てられてい

表１　ペリカンがグロスミュンスターの図書館蔵書目録 p.139 で示した分類体系

［第１欄］	［第２欄］
Grammatica 文法	Philosophia 哲学
Logica 論理学	Naturalis 自然哲学
Rhetorica 修辞学	Medica 医学哲学
Arithmetica 算術	Moralis 道徳哲学
Geometrica 幾何学	Jus Ciuile 市民法
Musica 音楽	Pontificium 教会法
Astronomia 天文学	Oratoria　弁論術
Theologia biblica 聖書神学	Historica 歴史
Scolastica スコラ神学	Poetica 詩学
Heretica 異教の神学	Geographica 地理学
Superstitio 迷信	

表２　ゲスナーによる『総覧』，『神学の分類』の分類体系

Liber	分　　類
I	De Grammatica & Philologia　文法，文献学
II	De Dialectica　論理学
III	De Rhetorica　修辞学
IV	De Poetica　詩学
V	De Arithmetica　算術
VI	De Geometria, Opticis & Catoptricis　幾何学，工学，反射
VII	De Musica　音楽
VIII	De Astronomia　天文学
IX	De Astrologia　占星術
X	De Diuinatione cum licita tum illicita, & Magia　正当・不当な予言，魔術
XI	De Geographia　地理学
XII	De Histoijs　歴史
XIII	De diuersis Artibus illiteratis, Mechanicis, & alijs humanae uitae utilibus　文字によらない諸芸，工学，その他の有用な伝記
XIV	De Naturali philosophia　自然哲学
XV	De prima philosophia seu Metaphysica, & Theologia gentilium　第一哲学あるいは形而上学，異教徒の神学
XVI	De Morali philosophia　道徳哲学
XVII	De Oeconomica philosophia　家政哲学
XVIII	De re Politica, id est Ciuili, & Militari　政治学，すなわち市民の政治と軍人の政治
XIX	De Iurisprudentia indices tres　法学索引Ⅲ種
XX	De re Medica　医学
XXI	De Theologia Christiana　キリスト教神学

る。さらに，図書館の成立がツヴィングリの蔵書にあったことと大聖堂図書館であることから当然であるが，「聖書神学」の分類では聖書の各書の順序どおりに分類が細分化されて，最も多くのページ（p.161–247）が費やされている。

一方，ゲスナーの分類体系は先ずは『総覧』の第1葉裏（a1^{v}）に目次として以下のように示されている（実際には2欄組）（表2）。

『総覧』にはこの順序通りにI–XIXの分類が収録され，XXIは『神学の分類』に収録されたが，残りのXX医学は結局未完に終わった。ゲスナーはこの分類体系について『神学の分類』の序文でIおよびIXからXIX分類の概要を述べ，XX医学については将来刊行するだろうと述べている（BV2-2, 第3葉裏（a3^{v}）－第4葉表（a4^{r}））。そして，神学の分類の体系を示した（BV2-2, 第5葉表（a5^{r}）－第6葉表（a6^{r}））。さらに，第8葉裏（BV2–2, a8^{v}）でI–XXI分類全体を学問体系の中に位置づけている[14]。それによれば，分類体系の頂点に「Philosophia comprehendit artes & scientias 学芸と学識を包含する哲学」を置いて，それを「Praeparantes 教養」と「Substantiales 実体」に大別し，「教養」をさらに「Necessarias 必修」と「Ornantes 選択」に二分した。「必修」を自由七科のうちの三科（Trivium）「Sermocinales 言葉の学」と四科（Quadrivium）「Mathematicas 数字の学」に分け，「言葉の学」にはI–IV，「数字の学」にはV–IXを関係づけた。「選択」は学芸（Artes）であり，それにはIV（再度登場）およびX–XIIIが関係づけられている。「実体」にはXIV–XXIが関係づけられている（表3参照）[15]。

ペリカンとゲスナーの分類体系を表3によって比較すると，ゲスナーはペリカンの分類にはない学芸分野の学問であるXIII，XVII，XVIIIのような分類を追加しながら，分類の順番自体はペリカンよりもはるかに中世以来の学問体系の秩序に従っていることが判明する。つまり，ゲスナーはペリカンの分類体系を参考にしたかもしれないが，それに準じたのでなく，むしろ伝統的な学問体系を基本にしながら，新たな分類をその中に整合性をもって取り入れていたということになる。両者の分類の違いは，ゲスナーの分類が伝統的な教育の階梯にしたがって編成された学問体系を踏襲したものであるのに対して，ペリカンの分類はあくまで聖書学・神学を分類の中心に据えて，その前に自由七科を置き，その後ろに学芸科目等を置いた分類であることである。

中世のパリ大学ソルボンヌ学寮の大図書館（Magna libraria）の分類では，最初に自由七科のうちの三科（trivium），学芸，自然哲学，アリストテレスの道徳哲学，自由七科のうちの四科（quadrivium），さらに医学が置かれており，その次に聖書，初期教父の著作，神学書の分類を据えて，最後に法学と日常使用されるライムンドゥスの哲学論集が置かれていた。全52分類のうち実に41分類が聖書，初期教父の著作，神学書に関する分類項目であった[16]。

16世紀後半に至っても図書館の排架分類は学問体系を再現するような体系性を示していなかった。1575年に設立されたオランダのレイデン（ライデン）大学図書館の内部が描かれた1610年刊行の銅版画にはレクターンの上部に分類が記入されている。それによれば，左側手前からMathematici（数学者）レクターン1台，Philosophi（哲学者）2台，Literatores（文学者）2台，

表３　ペリカンとゲスナーの分類体系の比較

ペリカンの分類	ゲスナーの分類				
Grammatica 文法	学芸と学識を包含する哲学	教養	必修	言葉の学	I.De Grammatica & Philologis 文法，文献学
Logica 論理学					II.De Dialectica 論理学
Rhetorica 修辞学					III.De Rhetorica 修辞学
Arithmetica 算術					IV.De Poetica 詩学
Geometria 幾何学				数字の学	V.De Arithmetica 算術
Musica 音楽					VI.De Geometria, Opticis & Catoptricis 幾何学，光学，反射
Asrtronomia 天文学					VII.De Musica 音楽
Theologia biblica 聖書神学					VIII.De Astronomia 天文学
Theologia Scolastica スコラ神学					IX.De Astrologis 占星術
Theologia Heretica 異教神学			選択	IV.De Poetica 詩学	
				X.De Diuinatone cum licita tum illicita, Magia 正当・不当な予言，魔術	
Philosophia 哲学				XI.De Geographia 地理学	
Philosophia Naturalis 自然哲学				XII.De Historijs 歴史	
Philosophia Medica 医学哲学				XIII.De diuresis Artibus illiteratis, Mechanicis, & alijs humanae uitae utilibus 文字によらない諸芸，工学，有用な伝記	
Philosophia Moralis 道徳哲学		実体		XIV.De Naturali philosophia 自然哲学	
Jus Ciuile 市民法				XV.De prima philosophia seu Metaphysica, & Theologia gentilium 第一哲学あるいは形而上学，異教神学	
Jus Pontificium 教会法				XVI.De Morali philosophia 道徳哲学	
Oratoria 雄弁術				XVII.De Oeconomica philisophia 家政哲学	
Historica 歴史				XVIII.De re Politica 政治学	
Poetica 詩学				XIX.De Iurisprudentia indices tres 法学	
Geographica 地理学				XX.De re Medica 医学（未刊）	
Superstitio 迷信				XXI.De Theologia Christiana キリスト教神学（『神学の分類』）	

Theologi（神学者）6 台，そして右側手前から Historici（歴史家）4 台，Medici（医者）3 台，Iurisconsulti（法律家）5 台となっており，おおよそ手前側が大学の教養課程で，奥が上級過程とみなされよう[17]。つまり，学問体系の秩序と図書分類の順序とは必ずしも一致していたわけでなく，むしろ分類全体として学問体系と整合性をとっていたのであろう。

４．ゲスナーによる分類の細分化の特徴

以上のようにゲスナーの分類は中世以来の伝統的な学問体系の中に留まっており，どこにも革新的な要素がないように思われる。しかし，ゲスナーの分類がペリカンの目録や中世以来の伝統

的な分類とは大きく異なる点は分類の細分化のシステムである。ゲスナーは分類を基本的に Libri, Tituli, Partes（ラテン語複数形）の順に細分化していることを上記の『神学の分類』の 8 葉裏の分類体系表の直前で説明している。しかしながら，実際に本書を調査してみると，そればかりでなく，ラテン語単数形で示すと Liber, Titulus, Pars, Segmentum, Paragraphus[18], Locus の順に 6 次区分していることがわかる。

各 Liber の冒頭には印刷業者への賛辞があり，それに続いて Liber 内の Titulus と Pars の一覧を置いている[19]。表 4 に示すように Liber は編集・印刷上の都合からぴったりと折丁単位で構成されている。そのため，折丁の途中で分類の記述が終わる場合には Appendix を加えてページを調整している。Titulus の記述はセンタリングして 1 行目を大文字で記述し，2 行目から大文字，小文字混じりで示す。Pars と Segmentum はセンタリングしてパラグラフマークに続いて大文字，小文字で示す。ところが，Titulus の直下に Segmentum が置かれる場合が少なくなく（本稿では Segm.I

表 4　ゲスナー『総覧』と『神学の分類』の分類システムと項目数

Liber	signatures	leaves	Index	Titulus	Appendix	Segm.I	Pars	Segm.II	Paragraph.	Locus
I	a-g^{6}	42		21		5	41	30	98	2468
II	h^{6}	6		12				1	4	326
III	i^{6}-k^{4}	10		12	1	9		2	28	608
IV	l^{6}-m^{8}	14		8		1	18	9	43	888
V	n^{4}	4		5		11			8	202
VI	o^{4}	4		5	1	2	2		4	145
VII	p^{6}	6		7	1	13		6	3	322
VIII	q^{8}	8		8		11	5		4	525
IX	r^{4}	4		6					6	240
X	s^{8}	8		11	1	18			13	506
XI	t^{6}-u^{4}	10		9	1	17			16	644
XII	x-z^{6} A-E^{6}	48		15	1	22	25	4	118	4155
XIII	F-G^{6} H^{4}	16		13	1	24			56	1028
XIV	I-Q^{6} R^{8}	56		12	2	54	6	5	65	4675
XV	S-X^{6}	24		11	1	20			46	1892
XVI	Y-Z^{6} Aa-Ee^{6}	42		34	1	31	5	5	146	3553
XVII	Ff^{8}	8		10		11			31	520
XVIII	Gg-Ii^{6}	18		18		2	9	2	47	1448
XIX	Kk-Qq^{6} Rr^{4}	46	3	24		54			14	4837
XXI	2a-2z^{6}, AA-BB^{6} CC^{7}	157		8			71	343	758	11148
Total		531	3	249	11	305	182	407	1508	40130

とする），Segm.I と Pars との使い分けは必ずしも明確ではない。しかし，同一 Titulus 内で Segm. I と Pars 直下の Segmentum（Segm.II とする）が併存することはないため，ゲスナーは Pars と Segmentum の使い方の違いを意識していたものと思われるが，本稿では識別のためそれらを区別して示した。

次に，Paragraphus は Titulus，Pars，Segmentum のどのレベルにも現れ，本文中の行の先頭にパラグラフマークを置いて示されている。Paragraphus は項目内で主題をある程度まとめたり，アルファベット順の配列の場合は A，B，C の順番を明示したりする役割を果たしている。その下位にある Locus はペリカンも採用していた用語であるが[20]，ゲスナーの場合は基本的に主題とその文献から構成される最小区分である。Locus は必ずしも 1 locus に 1 文献ではなく，複数の文献が示される例も少なくない。Locus の 1 行目は行先頭から始まり，2 行目以降は 2 文字分下げて示される。ゲスナーはこの Locus について Liber I，Ttitulus 13，Pars 4: De loci communes（Loci communes について）でその使い方を説明し，続く Pars 5: De ratione colligendi Locos communes（Loci communes をまとめる方法について）では Loci communes de rebus in uniuersum omnibus（世界のすべてにおける物事についての Loci communes について）と題して次のような 12 のジャンルの Loci communes を「神学の順序で」列挙するとしているが（BV2-1, fol.27^{r}），各ジャンル内では順不同である。ここでは各ジャンルは Segmentum で区別されるが，それぞれの Locus では文献の明示はなく，単なる言葉の列挙である。

1）Scriptura（聖書）（26 件）
2）Lex（法律）（34 件）
3）Deus（神）（31 件）
4）Cultus Dei（神の礼拝）（28 件）
5）Creatura（被造物）（28 件）
6）Homo（人間）（70 件）
7）Christus（キリスト）（42 件）
8）Ecclesia（教会）（50 件）
9）Sacramenta（秘跡）（85 件）
10）Magistratus（政務官）（87 件）
11）Artes（学問）（43 件）
12）Virtutes et uitia（長所と短所）（121 件）

ゲスナーは以上の Loci communes の数を約 950 件としているが（BV2-1, fol.27^{r}），実際には 645 件しかない。また，これらの Loci communes と『神学の分類』巻末にある『総覧』及び『神学の分類』に対する主題索引（Index communis）に採録された主題語約 4,000 語[21] との関係については説明さ

れていない。

以上のような6次区分に基づいて分類の全区分数を表4に示す。今回の調査でTitulusが249，Appendixが11，Titulus直下のSegmentumが305，Parsが182，Parsの下位のSegmentumが1,508，Locusが40,130件と算定された[22]。Locusの数については前述のセッライが示した40,119件を超える数字であった[23]。つまり，ゲスナーは少なくとも4万件以上のLocusを設定して，そこに主題と文献を示していたことになり，『総覧』と『神学の分類』が16世紀にあっていかに大規模な分類目録であったかが確認できよう。

ゲスナーはこのような明確な分類細分化システムを採用したが，Liber XIX法学では全体を3つのIndexに大別し，Index 1の下位に3 segmenta，Index 2の下位に24 tituli，その下位に51 segmentaを置いている。他の分類とは異なるこのようなIndexの設定の理由は，法学の分類のうちIndex 1とIndex 2はフィカルト（Fichard, Johann, ラテン語形Fichardus, Johannes, 1512-81）が編集した「教会法と市民法における昔の法律家から我々の時代までの最近の法律家のすべての著者たちの二つの索引 *Indices duo locupletissimi omnium scriptorum in Iure tam Pontificio quàm Ciuili à ueteribus & recentioribus Iureconsultis, ad haec nostra us[que] tempora editorum*」（Basel: [Robert Winter, 1539]）という索引をほぼそのまま引き写したからである。Index 2では原著にないTitulusを加えているが，内容は変更していない[24]。また，Index 2の末尾の‘IOAN. NEVIZANVS DOC. ASTEN. | Lectori S.’まではフィカルトに収録されているが，その次にある‘APPENDIX CONTINENS CATALOGVM Operarum Andr. Alciati I.C.’（付録：アルチアーティ全集のコンテンツ）はゲスナーが独自に挿入したものである（BV2-1, fol.348^{r}）。ゲスナーが利用した全集は1546–47年にバーゼルのイーゼングリン（Isengrin, Michael）が刊行した4巻本全集である（VD 16, A 1633）。Index 3（BV2-1, fol.348^{v}–374^{v}）は市民法と教会法の用語のアルファベット順の索引であり，使用箇所が略語で簡潔に示されている。全部で3,370項目にも及ぶ索引であるためゲスナー自身が作成したとは考え難いが，現時点ではその情報源がどこにあるかは詳らかにできない。

また，Liber XXI: Theologia（神学），Titulus 4: Moralis（道徳），Pars 10: De fortitudine（勇敢さについて）において唐突に，Segmentum 2: De materia fortitudinis, gloria, honore, fama & contrarijs.（勇敢さ，栄光，名誉，名声，反対の素質）とSegmentum 3: Habet consolations.（慰めをもつ）という2つのSegmentumが表記されている（BV2-2, fol.59r, 79r）。実際にSegmentum 2ではさらにその下位に6つのSegmentumが置かれている（BV2-2, fol.80v–81v）。この場合，Segmentum 1は記載されていない。さらに，Liber XXI，Titulus 6: Continet polemica（論争を含む），Pars 3でもSegmentum 1–4という項目を立て，さらにSegmentum 2で1つ，Segmentum 3で4つ，Segmentum 4では3つのSegmentumでさらに下位区分している（BV2-2, fol.120v–125v）。そのため，本稿ではいずれも同じレベルのSegmentumとして扱って算定した。ゲスナーはどのような意味を込めてこのような複雑な使い方をしたのであろうか。一方，Titulus 6，Pars 5ではOrdo（列）1–8という項目をSegmentumと同レベルに立て，その中をさらにSegmentumで細分している（BV2-

2, fol.126r–135v）。これらの区分は他の分類にはまったく見られないもので極めて例外的である。Titulus 6 は異端および宗教改革の論争に関する分類であり，当時にあっては極めて重要な問題を扱っていたことから，ゲスナーが独自にこのような分類を作ったというより，他の著作に情報源を求めた結果であろうと考えられるが，現時点ではその詳細を明らかにすることはできない。しかし，上記の Liber XIX の Index の例を含めてこのような例外的な区分の方法を考慮すれば，ゲスナーが部分的に他の著作を引き写したために分類体系に不統一が生じ，分類目録としては全体的に一貫性を欠いてしまったと言うことができよう。

5．文献採録方法とその特徴

表 3 に示すように分類 I，XII，XIV，XVI，XIX，XXI はとりわけ多数の locus を収録しており，ゲスナーの学問的関心を反映している。その中から特徴ある分類の例について言及しよう。

Liber I，Titulus 13，Pars 7: De Bibliothecis（図書館について）は 63 件の著者目録類からなる「書誌の書誌」となる（BV2-1, fol.28^{r}–29^{r}）。特に第 2Paragraphus からは著者名の名姓順に配列され，書名と著者の学問分野が記載されている。この「書誌の書誌」は史上最古の「書誌の書誌」の例であろう。

また，Liber I，Titulus 20: De grammatica Graeca（ギリシア語文法）では，Pars 1: De lautibus Graecae linguae（ギリシア語の賞賛）で 3 文献を収録し，Pars 2: De literis（文字）で 5 文献と 1 参照を含む（BV2-1, fol.36^{r}）。Pars 3: De libris Grammaticae Graecae（ギリシア語文法書）では 3 文献の著者，書名，印刷地，印刷者，判型等が記載されるが，第 1 巻に該当する文献が見当たらないため，これらは補遺文献ということになる。さらに，その下位の Segm.II は名姓順で文法家 58 名が収録され，著者名・書名が記載される（3 件には出版事項あり）（BV2-1, fol.36^{r}–36^{v}）。Pars 5: De Lexicis Graecis（ギリシア語辞書）では 35 文献の著者名・書名が記載されている（3 出版事項，2 所蔵先あり）（BV2-1, fol.37^{r}–37^{v}）。Pars 7: Vocabula aliquot Graeca ordine alphabeti, ut passim apud authores explicantur（著者たちの間でばらばらに説明されているようなアルファベット順のいくつかのギリシア語名詞）は名詞と文献典拠 114 件を含む名詞のアルファベット順索引となり，カエリウス（Caelius Rhodiginus, イタリア語名 Ricchieri, Lodovico, 1469–1525），ツェツェス（Tzetzes, Johannes, ca.1110–1180）等の限られた著作の該当箇所が簡略に示されている（BV2-1, fol.37^{v}–38^{v}）。

Liber XII: De historijs（歴史）では，Titulus 1: De historia, & pertinentibus ad eam in genere（歴史とその及ぶところ一般），Titulus 2: De Europa in genere（ヨーロッパ一般），Titulus 3: De Caesalibus singillatim, secundum ordinem temporum（時代順の各ローマ皇帝），Titulus 4: De Italia, & cisalpine Gallia（イタリアとアルプス以南のガリア），Titulus 5: De Gallia transalpinea. Heruetiam Germania adiunximus（アルプス以北のガリア，それに続くスイス・ゲルマニア），Titulus 6: De Hispania（ヒスパニア），Titulus 7: De Germania, et finitimis regionibus, ad Oceanum praesertim Asiae uersus（ゲルマニア，そして特にアジアへ向かって大洋に至る隣接地域），Titulus 8: De

Graecia, & finitimis regionibus, ut Macedonia, Thessalia, Illyria, &c.（ギリシア，そしてマケドニア，テッサリア，イリュリア等の隣接地域），Titlus 9: De Africa（アフリカ），Titulus 10: Historiae Turchicae（トルコ史），Titulus 11: Asia minor & maior（小・大アジア），Titulus 12: Insularum historiae（島嶼の歴史）と地域別に区分されている。これらの中で Titulus 1–4，7，9，12 は Segm. I で細分化されるが，Titulus 5，8，11 は Pars で細分されている。Titulus 3 では即位順にローマ皇帝 267 名，東ローマ皇帝 14 名，神聖ローマ皇帝 62 名の名前と文献が示される人物文献索引となる。また，Titulus 4 では第 3Segm.I: Catalogus illustrium Romae & in reliqua Italia uirorum（ローマの著名な人々と残りのイタリアの著名な人々の目録）では 472 名の人名と文献が示される人物文献索引である。

Liber XIV 自然哲学の分類の Titulus 8: De plantis（植物），第 4Segm.I: Herbarum fruticum, suffruticum, & spinarum（実のなる草，小低木，刺のある草）ではラテン語植物名のアルファベット順索引で 851 件を収録している。そこでは，植物名と共に，古代薬草学者ディオスコリデス（Dioscorides, Pedanius）あるいはプリニウス（Plinius Secundus, Gaius, 23–78），また 16 世紀の植物学者フックス（Fucks, Leonhard, 1501–66）などの人名と参照箇所を略語で簡略に示しており，植物名文献索引となっている（BV2-1, fol.197^{v}–204^{r}）。一方，Titulus 11: De animalibus（動物）では，その下位にさらに Liber I–VI を設定して，Liber I: De quadrupedibus uiuiparis & ouiparis（胎生と卵生の四足獣）123 件，Liber II: De auibus（鳥類）320 件，Liber III: De piscibus & aquatilibus（魚類と水生動物）357 件，Liber IV: De serpentibus（蛇類）38 件，Liber V: De insectis（昆虫類）53 件を収録している。各 Liber ではラテン語動物名をアルファベット順に配列して，アリストテレス（Aristoteles, 384–322 B.C.）やアエリアノス（Aelianus, Claudius, ca.170–ca.235）等の古代に動物誌を著した著者を A，Ael. と略語で簡略に示し，さらに動物のラテン語名に対応するドイツ語名を記載して，動物名文献索引となっている（BV2-1, fol.221^{r}–233^{v}）。ゲスナーは後に 5 巻本で『動物誌 *Historia animalium*』の刊行を開始するが，ここでそれを予告しているかのようである。なお，ここには Liber VI: De animalibus secundum genera & speccies（類と種に従う動物について）という区分が示されているが（BV2-1, fol.221^{r}），本文にはその区分も記述も設けられておらず，目次の記述だけとなった。ゲスナーはここでも Titulus の下位に Liber を設定するという分類体系の逸脱を犯しており，上述のように統一性に欠けた編集を露呈している。

6．収録文献の特徴

以上のように『総覧』では非常に多様な主題索引が提示されているが，そこでは典拠として多様な文献が示されている。本来であれば『万有書誌』第 1 巻に収録された著者，書名がここに分類別で収録されているはずであるが，ゲスナーがどれほどそれらの文献を利用しているのかは統計的な分析がなされていないので不明である。ところが，それらの中で様々な分類で繰り返し引用されている特に目を引く文献がある。例えば，Liber IV: Poetica，Titulus 1: De poetica in genere

（詩学一般）では Locus が全部で 129 件あり，合計で 149 文献が記載されているが，そのうち 32 件が‘Caelius’と示されている。ゲスナーは『万有書誌』第 1 巻序文で詩人に関しては Crinito, Pietro, *Viri undecunque doctissimi*（Basel: Heinrich Petri, 1532）と Giraldi, Lilio Gregorio, *Historiae poetarum tam Graecorum quam Latinorum dialogi decem*（Basel: [Michael Isengrin], 1545）を参考文献に挙げているが，ここでは Crinitus が 10 回，Giraldi が 5 回にすぎないので，それよりもはるかに多く Caelius が参照されていることがわかる。

別の分類である Liber V: De arithmetica（算術），Titulus 1: De mathematicis disciplinis genere（数学一般）には Locus が 30 件あり，そのうち Caelius が 3 回，Aelianus，Maurolico（Maurolico, Francesco, 1494–1575），Pacioli（Pacioli, Luca, ca.1445–1517）がそれぞれ 2 回である。続く Titulus 2: De arithmetica in genere（算術一般）には Locus が 24 件収録されているが，そのうち Caelius が 7 回，Agrippa（Agrippa von Nettesheim, Heinrich Cornelius, 1486–1535）が 6 回，Polydorus（Vergilius, Polydorus, 英語形 Polydore Vergil of Urbino, ca. 1470–1555）が 3 回であり，他の文献を凌いでいる。さらに，Liber XII，Titulus 5: De supellectile, de uasis in genere, de escarijs & potorijs uasis, & alijs domine，sticis. De chartis & typographis（家財，容器一般，食器と酒器，そしてその他の家の道具について，紙と印刷について）では 79 loci あるが，実に 53 loci で Caelius が参照されている。Caelius[5] に続いて多い参照回数は Crinitus の 9 回であるため，Caelius に大きく依拠していることがわかる。この傾向はこれらの分類ばかりでなく，随所に認められことから，ゲスナーが分類目録を編纂する際に Caelius の著作を大いに参照していたと判断することができる。

Caelius とはラテン語名 Caelius Rodiginus という 16 世紀イタリアの人文主義者リッキエーリである。彼はフェッラーラでアリストテレス学者レオニチェノ（Leoniceno, Niccolò, 1428–1524）に師事した後，フランスに渡り，即位したばかりの国王フランソワ 1 世（François I, King of France, 在位 1515–47）から支配下にあったミラノのギリシア語講座の講師に任命された。その時，ヴェネツィアのアルド印刷所から彼の主著となる『古代学講義 *Sicuti antiquarum lectionum commentaries concinnararat olim vindex ceselus*』（Venetijs, 1516）を上梓した[25]。本書は注目されたようで翌年にはパリでジョス・バード（Bade, Josse, 1461/62–1535）が，バーゼルではフローベン（Froben, Johann, ca.1460–1527）がそれぞれ刊行した。その時には本書は 16 書の構成であった。ゲスナーは『万有書誌』第 1 巻の中で 1542 年刊行のバーゼルのフローベン版『古代学講義 30 書 *Lectionum antiquarum libri XXX,*』（Basileae: [per Hier. Frobenium et Nicol. Episcopium], 1542）（VD 16, R 2165）に言及して，文字順に配列された豊かな索引と，書の順番に従った章ごとの索引があることを付記していた（BV1, 487^{v}）。また，ゲスナーは『総覧』の Liber I，Titulus 13，Pars 2 で索引作成法の説明の中で本書の索引が非常に豊かであると言及している（BV2-1, fol.20^{v}）。実際に 1542 年版では前付けとして序文と索引が 130 葉（260 ページ分）あり，その後に本文が 1182 ページある。前付けでは献呈文に続いて 4 欄組の語彙索引が 175 ページ分あり，続く 3 欄組で 4 ページ分の著者名索引，さらに 4 欄組で 3 ページ分の人名一覧がある。次に，リッキエーリの序文に続いて 30 書

表5　ゲスナー『総覧』Liber XII, Titulus 5に引用されたリッキエーリ『古代学講義30書』の27書27章の記述

Locus 番号*	Locus 項目
11	Vasorum nomenclaturae diuersae: figlina subigi aromatibus solita: dinos, Thericlia cur dicant <ur>
28	Calycis notiones
34	Amphithetos phiala, phialarum species
38	Cantharus quid & Cantharia
39	Cothon, cothonismus, acrocothones

＊Locus 番号は筆者が付与したもの。

892章の目次が49ページ分ある。さらに，14ページ分の書・章ごとに引用された著者一覧がある。ゲスナーは2種類の索引と記述しているが実際には5種類の索引がそなえられていた。ゲスナーは目次を章ごとに切り取って細長いスリップ状にして，それらを分類順に並べ替えたり，アルファベット順に並べ替えて索引にしたりしたのである。印刷本は表ページと裏ページがあるため，同じ本を2部用意して1部を表ページ用，他の1部を裏ページ用にして切り取りとれば全部のページを切り取ってスリップにすることが可能であると説明している（BV2-1, fol.20^{r}–20^{v}）。こうしてゲスナーはリッキエーリの目次から切り取った章ごとのスリップをいくつかの分野の情報源として利用していたと考えられよう[26]。上記のLiber XII，Titulus 5の記述から一例を挙げると，リッキエーリ『古代学講義30書』の27書27章からゲスナーは5 locisを採録している（表5）。

『古代学講義30書』の27書27章の目次は以下のように記述されている（番号は筆者による）。

> (11) Vasorum nome<n>claturae diuersae: figlina subigi solita: dinos:thericlia cur | dicantur: (38) cantharus quid: cantharia: cornibus usos in potu priores: κεραται cur dicatur: | ciboria, cotyle, encotyle lusus, (39) cothon, cothonismus, acratocothones: laphyctae qui di-| cantur: calicis notions :latex quid: Scytharum uinolentia: Scytissare: Herculanus no-| dus: Scythos cognomen: (34) amphithetos phiala: phialarum species: uasati qui dicantur, & | nasati.

表5の5例の記述のうちLocus 28を除く4例が目次の中のLocusの番号を付与して下線で示した箇所をそのままLocusの主題語に採用していることがよくわかる。ゲスナーはこのような目次一覧あるいは索引を極めて重要な情報源にしていたのである。

7．まとめ

以上述べてきたように，コンラート・ゲスナーは『万有書誌』第2巻の『総覧』および続編の『神学の分類』で示した分類体系は，コンラート・ペリカンが編纂したチューリヒ大聖堂グロスミュン

スターの図書館蔵書目録の分類に準じたものではなく，中世以来の伝統的な学問体系を踏襲したものであった。この分類目録の革新性は分類の細区分のシステムであり，Liber（21 件），Titulus（249 件），Pars（182 件），Segmentum（都合 712 件），Paragraphus（1,508 件），Locus（40,130 件）からなる詳細な 6 次区分を行った点である。そこにはその他に Appendix（11 件）も含まれていた。しかし，いくつかの箇所で細分化のシステムに逸脱があり，Index（3 件）を Titulus の上に置いたり，Segmentum の下をさらに Segmentum で区分したり，Segmentum の下に Ordo を置いたり，さらには Titulus の下に Liber を置いたりして，分類システムは統一性を欠いたものであった。その逸脱の原因は Index の例で明らかのように参考にした文献の構成に影響を受けていた可能性がある。

一方，これらの分類目録には「書誌の書誌」，「人物文献索引」，「語彙文献索引」，様々な「主題文献索引」として編集された箇所が多数あり，全体として主題文献索引の性格をもった分類目録ということができよう。

そして，これらの分類目録に収録された文献には特に繰り返し引用された文献があり，中でも 16 世紀イタリアの人文主義者リッキエーリの『古代学講義 30 書』（バーゼル，1542 年）が活用されていたことが判明した。ゲスナーは分類目録を編集する際に本書の目次をばらばらに切り取って使用していたと考えられる。本書はゲスナーの重要な情報源になっていたことが明らかである。

今後の課題は，まずはリッキエーリと同じように活用された他の文献を統計的に抽出して分析して明らかにすることであり，それによってゲスナーがどのようにして分類目録を編集していたのか考察することである。また，ゲスナー『補遺 *Appendix*』（Zürich, 1555）にはどのような文献がどのように採録されたのかを分析して，ゲスナー『万有書誌』の全体像を解明することである。

本研究は JSPS 科研費 25330401 の助成を受けたものです。

［注］

1 Escher, H., Die Bibliotheca universalis Konrad Gessner's, *Vierteljahresschrift der Naturforschenden Gesellschaft in Zürich*, 79, 1934, S.174–194.

2 dito, Konrad Gessner über Aufstellung und Katalogisierung von Bibliotheken, *Mélanges offerts à Marcel Godet*, Neuchâtel: Attinger, 1937, S. 119–127.

3 Lutz, H., Konrad Gesners Beziehungen zu den Verlegern seiner Zeit nach seinen Pandekten von 1548, *Mélanges offerts à Marcel Godet*, Neuchâtel: Attinger, 1937, S. 109–117.

4 Шамурин Е.И., *Очерки по истории библиотечно-библиографической классификации*, т. 1, Москва: Изд-во Всесоюзной Книжной Палаты, 1955, стр. 120–133; エヴゲーニー・シャムーリン著，藤野幸雄訳『図書分類＝書誌分類の歴史第 1 巻』金沢：金沢文圃閣，2007 年，p.133–142。

5 Archer, T., *General subject-indexes since* 1548, Philadelphia, PA.: University of Pennsylvania Pres, 1966, p. 40–54.

6 Bernstein, L.F., The Bibliography of Music in Conrad Gesner's Pandectae (1548), *Acta Musicologica*, vol. 45, fasc. 1, 1973, 119–163.

7 Wellisch, H.H., How to make an index: 16th century style: Conrad Gessner on indexes and catalogs, *International Classification*, vol. 8, No. 1, 1981, p. 10–15.

8 Serrai, A., *Conrad Gesner,* Roma: Bulzoni Editore, 1990, p. 99–202.

9 Leu, B.L., *Conrad Gesner als Theologe: ein Beitrag zur Zürcher Geistesgeschichte des* 16. *Jahrhunderts*, Bern: Peter Lang, 1990, S. 191–240.

10 Mayerhöfer, J., Conrad Geßner als Bibliograph und Enzyklopädist: der Zusammenbruch der mittelalterlichen artes liberales, *Gesnerus*, 22, 1965, S. 192.

11 Escher, H., Konrad Gessner über Aufstellung und Katalogisierung von Bibliotheken, S. 121–124; Serrai, A., op. cit., p. 138.

12 *Conradi Pellicani Bibliotheca*. Zentralbibliothek Zürich, Ms Car XII 4. ペリカンが編纂した蔵書目録は手稿のままチューリヒ中央図書館に保存されている。本書の閲覧は 2013 年 8 月と 2014 年 8 月にチューリヒ中央図書館でおこなった。この蔵書目録については M. Germann が詳細に研究を行い，収録された書物の分類毎の排架を復元して図に書き起こし，印刷本の版を特定して印刷出版年の分布を調査している（Germann, Martin, *Die reformierte Stiftsbibliothek am Großmünster Zürich im 16. Jahrhundert und die Anfänge der neuzeitlichen Bibliographie,* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1994）。

13 Germann, M., S. 70, Abb. 9. なお，2015 年 5 月の図書館情報学会春季研究大会で発表した時は，ペリカンの分類を 20 分類としていたが（参照：拙稿「ゲスナー『総覧』および『神学の分類』の分類システムについて」，『2015 年日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』，日本図書館情報学会，2015.5，p.17–20），その後調査で 21 分類であることが判明した。ここに訂正してお詫びいたします。

14 Braun, Lucien, *Conrad Gessner*, Genève: Editions Slatkine, 1990, p. 52. 雪嶋宏一「旅と文献情報の収集：16 世紀コンラート・ゲスナーの場合」，松田隆美編『旅の書物／旅する書物』，慶應義塾大学出版会，2015 年，p. 20, 図 5 参照。

15 Gessner, C., *Partitiones Theologicae,* Tiguri, 1549, 第 8 葉裏。

16 Nebbiai-Dalla Guarda, Donatella, Classifications et classements, *Histoite des bibliothèques françaises,* t. 1, Paris: Promodis, 1988, p385–388, Tab.3.

17 ジェームズ・W・P・キャンベル著，桂英史監修，野中邦子・高橋早苗訳『世界の図書館：美しい知の遺産』，河出書房新社，2014 年，p. 108 参照。

18 Paragraphus についてはゲスナーが直接言及している名称ではないが，本文中にパラグラフマークを示してそれ以前のまとまりと区別して記述していることから筆者が命名したものである。

19 ゲスナーは各分類の冒頭で印刷業者へ賛辞を送り，その次にその印刷業者による印刷販売書目録を付け加えている例が I，XI，XII，XIII，XV，XVI，XXI 分類で見られる（雪嶋宏一「コンラート・ゲスナー『万有書誌』と宗教改革」，『学術研究：人文科学・社会科学編』60 号，2011 年，p. 68–69 参照）。

20 ペリカンはチューリヒ大聖堂図書館蔵書目録の第 4 部として 373 ページから 611 ページまで Loci communes としてアルファベット順の主題索引を編集している。

21 ウェリシュが約 4,000 語と推定している。Wellisch, H.H.,op. cit., p. 13.

22 この統計については拙稿「旅と文献情報の収集：16 世紀コンラート・ゲスナーの場合」，p. 31, 表 2 でも予備的に示している。

23 Serrai, A., op. cit., p. 201.

24 バーゼル大学図書館に所蔵されるゲスナー旧蔵の Epiphanius Constantiensis, *Epiphanii episcopi Cypri de prophetarum vita & interitu commentaries graecus, …*,（Basileae: apud And. Cratandrum, 1529），BG IV 35:1（VD 16 E 1660）にはその他に，Rutilio, Bernardino, *Iurisconsultorum vitae*, ...,（Basileae: [Robert Winter], [about 1539]），BG IV 35:2（VD 16 R 3878）と Fichard, Johann, *Virorum qui superiori nostroque seculo eruditione et doctrina illustres atque memorabilies fuerunt*, ...,（Francoforti: Christianus Egenolphus, [1536], BG IV 35:3（VD 16 F921）が合本されており，ゲスナーの最も重要な情報源の一つになっていたことは明らかであるが，この Fichard の本に Fichard, Johann, *Indices duo locupletissimi omnium scriptorum in Iure tam Pontificio quàm Ciuili à ueteribus & recentioribus Iureconsultis, ad haec nostra us[que] tempora editorum* が合刻されており，ゲスナーはこの部分を利用していた。2015 年 8 月にバーゼル大学図書館で閲覧。Cf.: Leu, U.B., R. Keller, S. Weidmann, *Conrad Gessner's private library*, Leiden: Brill, 2008, p. 114–115, 118, 219.

25 リッキエーリ『古代学講義』初版は，1515 年にアルド・マヌーツィオ（Manuzio, Aldo, ca.1450–1515）の印刷所を引き継いだアンドレア・トッレザーニ（Torresani, Andrea, 1451–1529）によって刊行された。トッレザーニはアルド

の遺志を継ぐために「アルドとその叔父アンドレアの家にて in aedibus Aldi, et Andreae, soceri」という刊記を奥付に印刷した。

26 ゲスナーはリッキエーリの著作を多くの分類で引用しているが，現存するゲスナー旧蔵書の目録にはリッキエーリの著書はまったく見当たらない（Cf.: Leu, U.B., R. Keller, S. Weidmann, op. cit.）。ゲスナーはやはり本書を切り取って利用したため，保存されなかった可能性がある。